研究課題	一人一台端末を活用した探究活動の充実及び情報活用能力向上を目指した取組
副題	～iPad を用いて情報活用能力を向上させ、「総合的な探究の時間」を中心にした探究活動を充実させる。～
キーワード	
学校/団体 名	公立京都府立園部高等学校
所在地	〒622-0004　京都府南丹市園部町小桜町９７
ホームページ	http://www.kyoto-be.ne.jp/sonobe-hs/

１．研究の背景

本校は京都府中部の南丹市に位置しており、生徒たちは、小都市である南丹市や隣接する亀岡市、過疎化が進む地域である京丹波町など多様な地域から通学しており、進路希望も多岐に渡る。このような多様な生徒に対して、本校では「Global＆Aware」（世界へ、思いやりを持って）を教育方針に、世界を見据えたGlobal教育を行ってきた。その中で、探究活動を行い、その学びを通し、世界と地域を結ぶ生徒の育成を目指している。これまでは、海外研修旅行先の高校生との交流やＢ＆Ｓによるフィールドワークを通じて、学校で行った調査・内容を検証し、レポートにまとめ、発表させてきた。現在では生徒が一人一台のタブレットを所有している状況であり、場所や時間の制約のない中で、情報の精査や発信などができる環境が整った。それを利用して個々の生徒に「Global」から「Glocal」な問題を探究する視点と手法を身に付けさせ、効果的に情報活用能力の育成を図ることが急務である。

一人一台端末の導入に伴い、生徒の情報へのアクセスは容易になったが、系統だった適切な情報収集方法や分析スキルの指導には至っていない。また、最終的なプレゼンテーションの形にする際に、情報の受け手にわかりやすい表現を選択するための指導も十分には行えていないのが現状であり、この課題を改善したいと考える。

２．研究の目的

本校が取り組む教育プログラムは「SONOBE Global Research Program」と名付けている。このProgramの特徴は、本校が今まで取り組んできた個々のProgramを体系化するとともに、「Global」にとどまっていた取組を、行政や企業、大学を巻き込んだ地域一体型の「Glocal」な取組に発展させるところにある。この研究を行う上では、以下の能力が必要となる。①自身が設定した問いについて、ＩＣＴ機器を活用し、必要な情報に自らアクセスする力。②得た情報に対してエビデンスに基づいて対話的に解釈を深め、情報を精査して活用する力。③得た情報をまとめて効果的に表現する、情報発信力。④ＩＣＴ機器を自らの必要に応じて活用する力。これらの能力を身につけることで、「Global」な視点を持ちながら「Glocal」な問題を探究する視点と手法を身につけ、世界のどこで学び、どこで働こうとも、常に自らの生まれ育った地域を意識する姿勢を持った生徒、社会に革新を起こす生徒を育成することが、地域密着型の学校経営を目指す本校にとっても、世界に雄飛することを目指す生徒にとっても、必要な視点であると考えている。

３．研究の経過

３月　令和５年度　１年及び２年「総合的な探究の時間」担当者打合せ
４月　職員会議　令和５年度 Area Study 実施計画の説明
各教科におけるＩＣＴ担当者の決定
Area Study 開始（12 月まで 12 回実施）
６月　１年生一人一台学習用端末（iPad）の使用開始
２年生　ミニ探究活動（Power Point 資料作成）
７月　２年生一人一テーマによる「地域探究」開始
９月　教科及び総合的な探究の時間で震災学習の実施
１年生グループによる「ミニ地域探究」開始
10 月　２年生　研修旅行フィールドワークの実施（九州・東京方面）
１年生　南丹市農林商工部商工課による講演会の実施
11 月　２年生　論文作成及びクラス内プレゼンテーションの実施（～12 月）
12 月　１年生　クラス内プレゼンテーションコンテストの実施
１年生　学年発表会の実施
１月　２年生　学年発表会の実施
総合的な探究の時間アンケートの実施
２月　グローバルネットワーク京都交流会参加
生徒実践発表会の実施
３月　京都府立大学窪田好男研究室主催「総合的な交流の時間」参加

４．代表的な実践

（１）１年「総合的な探究の時間」

１年生については、自ら問いを立て、根拠のある情報をもとに課題についてじっくりと考える力を身に付け、自らが調べたことを文章やスライド形で発表する力を身に付けることを、段階を踏んで実施することを計画していた。

年度当初には図書館オリエンテーションを実施し、そこで書籍による情報とインターネット上の情報の違いや公的な情報にアクセスすることの重要性を伝えた。その後、地域に対する関心を高めながら、情報をまとめて発表する練習をするために、「駅で繋がる私と社会」という活動に取り組んだ。グループに分かれて、近隣のＪＲの駅を各グループに割り当てて、駅や周辺施設などについて、一次情報も活用しながら調べて、発表する活動である。地元の駅でありながら、知らないことも多くあり、「もっとこうなればいいのに」という問題意識を喚起することができた。６月から iPad を使うことが可能になり、調べて発表資料を作成する上で活用することができるようになった。コンピュータ室を使う必要がなく、発表についても Apple TV を使えば生徒の端末から投影することができ、準備から発表まで施設面では問題なく進めることができて、非常に助かっている。

２学期は地域の課題について調べてまとめる活動を行った。本年度はグループで協力する中で、発表の質を高め、協働する力を伸ばしたいと考え、昨年度の個人での取組からグループでの取組に変更した。テーマ設定に向けて、南丹市議会の議会便り「かけはし」などの資料を配布した。10 月には南丹市農林商工部商工課の國府様による講演会を実施した。地方自治体と企業との関係が話の中心であったが、南丹地域の現状について、具体的なデータをもとにお話ししていただき、非常に有益な講演会となった。２学期をかけて取り組んだ地域課題に関するミニ探究の中でも、複数のグループが講演会で触れられたものも含め、公的なデータを根拠とした発表を行っていた。

３学期は第２学年で行く台湾研修旅行へ向けての準備のスタートとして、台湾についての基本的な事項について学習した後、各自が台湾について調べたことをグループ内で発表する活動を行った。時間は限られていたが、言語、文化、歴史などそれぞれが興味を持ったテーマで調べ、Power Point やロイロノートを使って資料を作成し、グループ内で各自の iPad を使い発表することができた。また、研修旅行の訪問地である台湾についての関心も高まり、次年度の探究活動につなげることができた。

（２）２年「総合的な探究の時間」

２年１学期には、２学期の地域探究に向けて再度「探究とは何か？」を確認する取組を行った。特に調査して根拠になるデータを集めることの重要性を意識させることに主眼を置いて、次のテーマでグループによるミニ探究活動に取り組んだ。

写真のグループは「修学旅行生（中学生）の京都観光（１日）の案内をすることになった。どんなコースにする？」という問いを選択して、調査・分析・発表を行った。なぜそう考えたのかを根拠を示してまとめることの難しさを感じたグループが多くあったが、ここでのつまずきが２学期の課題研究につながった。

生徒たちは iPad を使って情報収集を行い、スライド資料を作成し、発表も Apple TV を使って行っている。

２学期は地域探究を行い、一人一テーマで地域の課題とそれを解決する提案を行うことを目標に探究活動に取り組んだ。また、10 月には研修旅行で東北・東京方面を訪問した。実際に自分の目で見ることのや現地でしか得られない情報の重要性を理解するため、班別自主研修を活用した。仙台や東京という地元とは規模の違う都市への訪問であったが、それぞれの課題意識を持って実際に体験をする貴重な経験となった。地球規模とはいかないが、他の都市と地元を比較する視点を獲得して、それを課題研究に生かす生徒もいた。

論文をまとめた後はプレゼンテーション資料を作成し、11 月から１月初旬に、各クラスで発表会を行った。そこで優秀な発表をした生徒を集めて、１月に２年生の学年発表会を実施し

た。

学年発表会終了後はこれまでの取組を自身の将来につなげるために、キャリア教育の一環として進路探究を行った。自分の特性を理解し、社会において自分の果たせる役割は何かについて考えながら、具体的な進路希望先を設定して志望理由書を書く活動に取り組んだ。

（３）Area Study

１年生の希望者を対象として Area Study を実施した。このプログラムは、京都産業大学との高大連携による取組である。国や地域の枠を越え Global な視点で世界の諸問題について考える基礎を養うため、世界を３つの Area（ヨーロッパ圏・アジア圏・英語圏）に分割し、それぞれの国や地域の言語や文化について学ぶ講義が中心のプログラムである。外国語学部に加えて、国際関係学部、さらには広く世界について知るために理系である理学部や生命科学部の先生も講座を担当していただいている。

５．研究の成果

（１）「総合的な探究の時間」の取組について

１年生については、探究的な学びに必要となる基礎的な力の育成を目指したプログラムを実施してきた。地域探究を終えた２学期末にアンケート調査を実施し、入学時と現在のスキルについて自己評価を行った。以下の項目について、「１」（非常に低い）から「10」（非常に高い）の 10 段階で評価を行った。

取組を終えて、全ての項目で力が伸びたという結果になった。絶対的なスコアや伸び率に差はあるものの、生徒の実感としてできるようになったことがわかる。

１年　取組前後での自己評価	取組前	取組後	差
項目１　検索エンジンを使って調べる力	5.6	6.7	1.0
項目２　Word を使って文章を作成する力	4.7	6.1	1.4
項目３　調べた情報をわかりやすく文章にまとめる力	4.9	6.0	1.1
項目４　文章を読み返し推敲する力	4.9	5.8	0.8
項目５　プレゼンテーション用のスライドに情報をまとめる力	4.7	6.0	1.3
項目６　スライド作成で、文字の大きさ、構成、色使い等デザインを考える力	4.9	5.9	1.0
項目７　メモを見ずに発表する力	4.5	5.1	0.6
項目８　みんなが十分に聞き取れる声の大きさで、はっきりと話す力	5.1	5.6	0.5
項目９　聴いている人の反応を見ながら話す力	4.7	5.2	0.5

また、図書館オリエンテーションや講演会などを通して、公的なデータの重要性を訴えてきた。１年の学年発表会に参加したグループには自分たちが課題と考える根拠に、官公庁が出している客観的データを活用するものもあった。昨年度の実践と比較すると改善が見られたと言える。

２年生については、高いレベルの発表をする生徒が多く見られた。「総合的な探究の時間」

の担当者会議で学年発表会代表選考を行った際も、代表を絞るのに苦労したクラスもあった。一次資料の重要性を感じた生徒の中には、探究活動を進める中で、学校外の専門家等に話を聞いてみたいという生徒も出てきた。本校の学校運営協議会でも協力の申し出を頂いた。実際にインタビューが実現した事例:亀岡市のプラごみゼロ宣言を受けたゴミ処理について調べていた複数の生徒が亀岡市環境政策課の担当の方に話を伺う機会を設けられた。Zoom でのオンラインインタビューであったが、30 分を越えて活発に質疑が行われた。

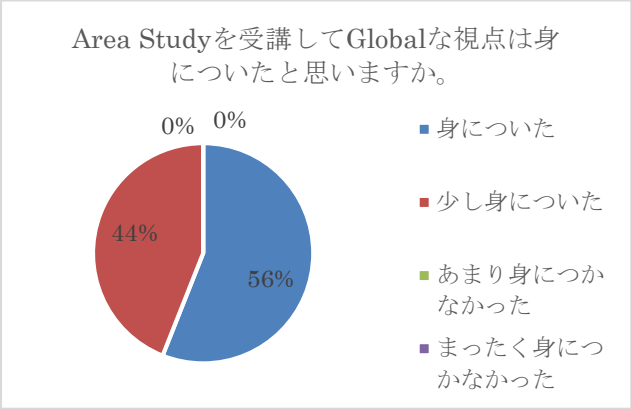
１・２年生の優秀発表者は、２月に行われた「生徒実践発表会」でも活躍の場が与えられ、１年間の取組の成果を他の生徒と共有することができた。参観生徒の多くも刺激を受けており、特に１年生は来年度先輩の発表を超えたいと感じたようである。

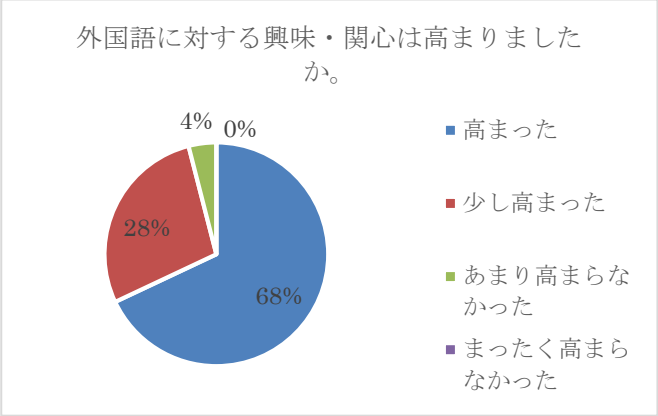
学校外での発表の機会として、京都府立大学公共政策学部の窪田好男研究室主催「総合的な交流の時間」が２月に南丹市で開催され、本校２年生３名が「総合的な探究の時間」で行った発表を行った。大学の教員、大学生だけでなく、南丹市長や南丹市職員の方などを前に堂々と成果を発表し、好評を博した。

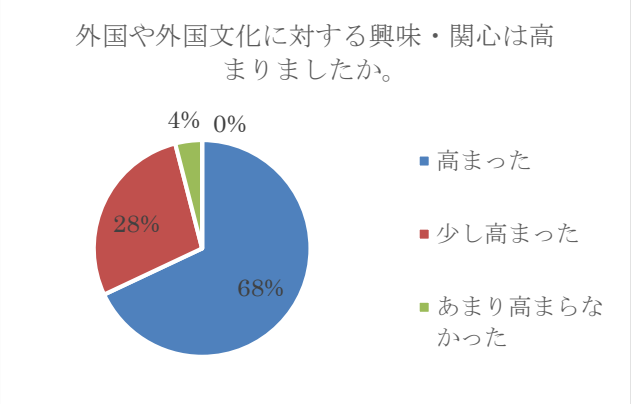
「総合的な探究の時間」ではないが、本校が所属する府立高校のグループ「グローバルネットワーク京都」で行っている交流会では、２年生が英語プレゼンテーションを行い、Not Rubbish – Our Dish and Wish というタイトルで発表を行った。フードロス問題に、「訳アリ食材×空き家の活用」という視点でアプローチした発表で、最優秀賞を獲得した。半年に及ぶ準備期間の中で努力を続け、探究的な学びの成果を存分に発揮した発表であった。

（２）Area Study

１年生希望者対象に行った Area Study は本年度 30 名の生徒が受講した。全 12 回の講座終了後に実施したアンケートの結果、参加生徒のほとんどは外国語、外国文化などへの関心が高まり、グローバルな視点を獲得したと感じている。







６．今後の課題・展望

本年度「総合的な探究の時間」を担当した教員からは、プレゼンテーション資料作成はできるが、文章にまとめる力が弱いという声が多く聞かれた。１年生対象のアンケート結果でも文章作成に関する項目では伸びが少なかった。２年生についても同じ課題が見られ、情報が見つかっても自分の言葉で文章にすることに困難を抱える生徒が多く見られた。本年度は担当者がワークシートを作成して緊急的に対応したが、次年度以降は国語科とも連携を取りながら、作文指導を基礎から見直す必要がある。

Global な視点の獲得については、ここ数年コロナ禍もあり進めにくい状況にあったが、本年度より国際交流活動が再開し、今後ますます力を入れていく必要がある。研修旅行は令和６年度に海外（台湾）に行く予定であり、「総合的な探究の時間」も活用しながら計画的に実施したい。また、Area Study は継続・発展できるように考えており、より多くの生徒が参加できるよう内容や実施形態の見直しも行いたい。

７．おわりに

今年度は、研究助成を活用しながら、「総合的な探究の時間」を中心に、世界に目を向けながら、地域の課題を考える活動を通して、生徒が高校卒業後も活用できる力を育てる実践を進めることができた。これまでの取組をさらに発展させる中で、今後は校内組織の改善や外部機関とのさらなる連携・協力の必要性、さらには現在の生徒が抱える課題なども明らかになた。本校でこれまで実践してきたグローバル教育やパフォーマンス評価の実践という財産を活かしながら、今年度の実践を途切れることなく継承していき、生徒たちが高校卒業後に社会で活躍できる下地作りができるよう、今後も ICT の活用も含めて教育内容・方法を改善していきたい。

最後になりますが、本年度このような貴重な機会を与えていただいた、パナソニック教育財団関係者の皆様に紙面を借りて深くお礼を申し上げます。

８．参考文献

・松下佳代・前田秀樹・田中孝平(2022)『対話型論証ですすめる探究ワーク』勁草書房
・西岡加名恵他(2017)『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる』学事出版